

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 57

June 15, 2007

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 29 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 29 回大会は、4 月 28 日(土)、同志社大学京田辺キャンパス恵道館で開催されました。雨模様の天候にもかかわらず 150 名(会員 106 名、新入会員 14 名、当日会員 30 名)という例年の大会より多くの参加がありました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 56 名でした。

恒例のワークショップは「日本人英語学習者作文コーパス JEFLL: 概要と検索ツールの紹介」と題して投野由紀夫先生(東京外国語大学)が星野守・渡辺亮嗣両氏(小学館コミュニケーション編集局)のサポートを得て、中学・高校の英語学習者のべ 10,000 人以上の自由作文を収集した学習者コーパス EFLL Corpus の紹介を行いました。コーパスのデザイン・スキーム、データ収集方法と構築プロセスの説明に加えて、2007 年春に小学館コーパス・ネットワーク(SCN)で無料公開される Web インターフェイスを使って、検索を実習しました。非常に分かりやすく、有意義で興味の持てるワークショップであったとの感想を参加者から聞きました。講師の方々にこの紙上を借りてお礼申し上げます。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して言語文化教育研究センター所長の松久玲子先生にご挨拶をいただきました。引き続き、山内信幸先生(同志社大学)の司会により年次総会が開かれ、2006 年度の決算報告と会計監査報告、2007 年度の予算説明があり承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。最後に

学会賞に関して、今回は応募が無かった旨事務局から報告いたしました。引き続き「英語教育」と「言語研究」のテーマでのパラレルセッションがもたれ、それぞれ 2 件の研究発表が行われました。最後に、午前中のワークショップと連動して「英語学習者コーパスの新展開」のテーマでシンポジウムが行われました。それぞれの司会の先生にご執筆願いました概要につきましては、「研究発表」および「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 60 名の参加がありました。野口ジュディ先生(武庫川女子大学)の司会のもと、会長挨拶の後、小迫勝先生(岡山大学)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にはすべての大会行事が終了いたしました。

今回の大会は参加人数が示すように、京都という地理的好条件と、また英語教育の発表が多かったことも影響してか、参加人数はこれまでに 2 番目に多い大会となり、事務局の予想を上回る盛会でした。本学会の HP 担当でもあり、運営委員として長年学会に貢献していただいている西納春雄先生には、開催校責任者として大会の準備、受付、ワークショップ、研究発表に細かい準備と心配りをさせていただきました。今回から会員になっていただいた長谷部洋一郎先生にも大変お世話になりました。加えて大会実施に協力くださった学生、院生の方々にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

### 研究発表

Corpus of Professional English からの科学技術分野特徴語の抽出と教育用語彙表の作成

中條 清美(日本大学)

内山 将夫(情報通信研究機構)  
星野 守(小学館)  
西垣 知佳子(千葉大学)

本発表では、中高、大学の1、2年で学ぶことになっている7,300語程度を全てカバーしても理工系の専門に必要な語彙数の77.7%しかカバーできていないことを指摘し、1)複数の統計指標を用いる方法、2)単語散布図(Wordplot)を利用して単語の専門度を可視化する方法の2種を用いて、客観的な精度の高い科学技術分野の特徴的な語彙の抽出を試み、教育用専門語彙表を作成したその過程と、抽出結果の有効性を報告したものである。

学術コンソーシアム PERC (Professional English Research Consortium) が構築した、22分野の科学技術学術雑誌のテキストから構成される、Corpus of Professional English (CPE) の2,000万語を基に、一般的な出現頻度順語彙リストでは頻度が低く選定されにくい特徴語が、上記の方法を用いると、容易に同定できることを論じた。

Wordplotを用いた特徴語抽出による科学技術分野特徴語上位30語のリストの説明では、CPEの頻度順を縦軸に、BNCの頻度順を横軸にした表を提示し、BNCでは頻度が低いが、CPEでは高い語彙など、全体を9分割にして説明し、抽出方法によって結果が相当違ってくることを証明した。

フロアーからも活発な質問が出された。同じ語彙でも分野が違うために意味の違うものや、専門分野で特に多い記号の取り扱いについて、今回の研究ではそれらは扱っていないとの回答があったが、今後の継続的な研究により、さらに精度の良い特徴語の抽出が可能になることを期待したい。

金子 朝子(昭和女子大学)

英語学習者コーパスにおける作文テーマの影響:英語母語話者コーパスとの比較分析

杉浦 正利(名古屋大学)  
坂上 辰也(名古屋大学大学院生)  
成田 真澄(東京国際大学)

本研究は、英語学習者コーパスの構築や分析において、コーパスデータの収集に設定する作文テーマがデータの言語的特徴に影響を与えるかどうかを、NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) の学習者コーパス (NICE-NNS) と母語話者統制コーパス (NICE-NS) を利用して検証したものである。

分析対象のテーマはSchool EducationとSportsで、同一参加者が両方のテーマで書いた学習者と母語話者それぞれ17件について、Wilcoxon符合順位検定とt検定を用いてToken、Typeなど7項目の分析を行った結果、平均単語長のみが共通して0.1%水準で有意であった。また、2名以上が産出した共通の内容語のうち10文字以上の単語を比較しても、内容語の偏り以外はほとんど違いがなかった。以上の点から、収集時の作文テーマの違いによるデータの言語的特徴への影響はほとんどないと結論づけた。

フロアーから、Type/Token Ratioが文の長さに影響される点を考慮しているかとの質問があったが、NICEは1時間で辞書を使わずに書くという同条件で収集したデータであり、さらに17名は全員上級者であるので、文の長さによる影響は考えていないという説明があった。また、2テーマについて書かれた作文を比較した分析項目が機械的で、テーマへの親密度を検討してはどうかという指摘もあった。今回はReid (1990) が挙げている項目のみを調査したが、複文、短文率などと合わせて今後検討してみたいという回答があった。コーパス研究の基礎となるデータの収集に関する大変有用な発表であった。

金子 朝子(昭和女子大学)

Had betterの用法:コーパスを用いてのshouldとought toとの比較を通して

久保井 直之(日本大学大学院生)

本発表は、3つの助動詞、had better、should、ought toをBank of Englishの一部を用いて分析したものであった。その3つの助動詞の前後に共起する共起関係を調べることを通して、固定

したフレーズでは epistemic/deontic のいずれかが片方の意味でのみ用いられること、中でも it を主語とするパターンとしては had better があまり用いられないこと、さらに had better の用いられる文脈を観察すると忠告を示す用法がもっとも多いことなどが示された。

橋本 喜代太(大阪府立大学)

コーパスを用いた動詞不変化詞構文のより詳細な記述の試み・清掃行為に関わる句動詞を例に

大谷 直輝(京都大学大学院生)

本研究は、構文理論/使用基盤モデルという認知言語学的理論に基づき、brush off the snow と brush the snow off のような語順交替ならびに brush off the snow と brush off the coat のような目的語交替、さらには句動詞の意味が比喩的に拡張されることがあるか否か、といった点について BNC を用いた調査を行なったもので、句動詞の意味を整理するうえで不変化詞の果たす役割が大きいことが改めて確認できる点で構文理論のような考え方が妥当であること、共起の二乗値が高い、すなわち動詞と不変化詞の共起使用頻度が高いものほど、意味がメタファー的に拡張される用法が観察されることなどが示された。

いずれの発表もフロアから複数の質問・コメントがあり、そのいずれもが発表内容の本質に関わるものであり、お二人の今後の研究に資するものであった。それらを参考にさらなる発展を期待したい。

橋本 喜代太(大阪府立大学)

## シンポジウム

英語学習者コーパスの新展開:

会話(NICT-JLE) vs. 作文(JEFL)コーパスの比較と分析

今回のシンポジウムは JEFL Corpus と NICT JLE Corpus という2種類の学習者コーパスを用いた研究の可能性を探るという目的で行われた。投野由起夫講師(東京外国語大学)が2つのコーパスの概要を紹介した後、英語学習段

階における語彙習得の発達過程の分析例が4つ提示された。

NICT-JLE vs. JEFL: 語彙・品詞使用の発達

投野講師が両コーパスからの単語・品詞 n-gram 分析を行った。レベル別に発達していく言語特徴のうち、filler、接続詞、名詞句の構造、to 不定詞、法助動詞、that 節を伴う動詞などがレベル差を顕著に表すものとして特筆されるものであった。

英語学習段階と名詞の内部構造発達

三浦愛香講師(東京外国語大学大学院研究生)は名詞句の内部構造、特に前置修飾と後置修飾の発達過程に関する分析結果を発表した。特に前置修飾に関しては、“all these” のような二重決定詞(double determiner)の構造がレベルによる差が大きいという事実や、冠詞の the が特に会話モードで発現率とレベルの相関が顕著だった点、後置修飾では関係節・前置詞句などの構造がレベル差を顕著にする要素である点などが調査により判明した。

英語学習段階と基本動詞の意味・構造発達:  
動詞 get に着目して

鈴木理恵講師(法政大学大学院生)は基本動詞の下位範疇化構造の発達を調査するため、動詞 get を選び、Swan (2005) に基づいて動詞型を7パターンに分類し、パターン検索および目視で JEFL、NICT JLE それぞれの get の用例をすべて分類した。その結果、両コーパスとも、比較的単純な構造(get + N, get + Adj)がレベルを追うごとに使用頻度が高くなる傾向があり、7パターンのヴァリエーションの拡がりよりも顕著に現れたのは NICT JLE の方であった。さらに意味分析の結果も、会話データの方がより広範な get の意味の使用が見られ、NICT JLE のデータの方がより成熟した学習者層を含んでいることを印象づけた。

日本人学習者コーパスに見る Metadiscourse Markers の使用傾向

小林雄一郎(法政大学非常勤)・山田洋文(明法中学・高等学校)両講師はメタ談話マーカー

(MDM) の発達に関して発表した。MDM は Hyland リストにより perl で自動付与された。その結果、MDM の使用頻度は全般に会話の方が多かったが、作文データの質が話し言葉に近い性格を持っていることも裏付けられた。さらに質的分析として、I、but、文を列挙する際の sequencing の用法などが過剰使用されていることを示した。

最後に投野講師による総括、続いて 20 分間の質疑応答が行われた。4 つの発表に関する質問だけでなく、コーパス構築の方法論やデータ分析の妥当性などに関しても活発な議論が行われ、学習者コーパスの今後の研究の方向性を示唆する有意義な意見交換の時となった。参加者も 150 名にのぼり、非常に充実したシンポジウムであった。

投野 由紀夫 (東京外国語大学)

### 人事に関する決定事項について

大会前日の 4 月 27 日午後 5 時 30 分より開かれた運営委員会において人事案が審議されました。まず、4 年間事務局長として英語コーパス学会の発展に大いに貢献されてきた赤野一郎先生(京都外国語大学)が、この 3 月で退任されました。深く感謝申し上げます。新しく山崎俊次(大東文化大学)が就任いたしました。宜しく願い申し上げます。今回、任期が終了する運営委員は全員継続と決まりました。会誌編集委員は山崎俊次(大東文化大学)が退任し、新しく大和田栄先生(東京成徳短期大学)が就任されました。その他の編集委員は継続です。学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)が退任され、投野由紀夫先生(東京外国語大学)がその任に就かれました。学会賞選考委員の家入葉子先生(京都大学)が退任された後、西村秀夫先生(姫路独協大学)、深谷輝彦先生(椋山女学園大学)、大津智彦先生(大阪外国語大学)の 3 人が新しく加わっておられます。その他の委員は継続です。新しい任務として、郵便局での会費処理の関係で会計の設置が必要との提案があり、承認されました。その担当を石川保茂先生

(京都外国語短期大学)にお願いしました。2001 年から会計監査の仕事を担当していただいた西村道信先生(大手前大学)が退任になりました。長い間のお仕事に御礼申し上げます。新しく梅咲敦子先生(立命館大学)就かれました。今回、退任された先生方のご尽力に対しまして、この場を借りまして、再度、衷心より御礼申し上げます。

### ハンドアウトのダウンロードサービス

第 29 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 6 月 30 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂先生(yasuishikawa@hotmail.com)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

1. Corpus of Professional English からの科学技術分野特徴語の抽出と教育用語彙表の作成
2. 英語学習者コーパスにおける作文テーマの影響: 英語母語話者コーパスとの比較分析
3. had better の用法: コーパスを用いての should と ought to との比較を通して
4. コーパスを用いた動詞不変化詞構文のより詳細な記述の試み: 清掃行為に関わる句動詞を例に
5. シンポジウム: 英語学習者コーパスの新展開—会話 (NICT-JLE) vs. 作文 (JEFL) コーパスの比較と分析

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

### 会誌『英語コーパス研究』第 14 号について

ニューズレターとともに会誌 14 号をお手元にお届けすることができました。研究論文 3

編、研究ノート1編、シンポジウム発表論文1部(3編)より構成されています。

研究論文は、19世紀における過去形と完了形の交替について扱った大津論文、there is no V-ing 構文の慣用性について論じた山崎論文、completely などの副詞の生起について意味的差異から論じた Yoshimura 論文の3点です。研究ノート(Fujiwara)は独自の学習者コーパスJUICE構築について報告しています。語法や統語特性からコーパス構築まで幅広い分野の論文、研究ノートを収録することができました。

シンポジウム発表論文は2006年4月の第27回大会時のシンポジウムを収録したものとっております。「文学テキスト分析におけるコーパスの利用」と題したものであることから、E. Spencer の *Faerie Queene* から H. Fielding の *Joseph Andrews*、さらに D. H. Laurence の “The Captains Doll” に至る幅広い文学作品において、コーパス活用の実例が紹介されています。

投稿者、査読者、編集委員の協力により無事刊行することが出来ました。この紙面を借りて感謝申し上げます。なお、会誌において不具合な点がありましたらお知らせ下さい。

塚本 聡(日本大学)

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

会誌『英語コーパス研究』第15号について

『英語コーパス研究』第15号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2007年7月31日(火)

(氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください。)

【原稿提出締切】2007年9月30日(日)

(ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙を添付のこと。)

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡

TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336

Email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文

英文 70 ストローク×35 行×15 枚以内

和文 35 字×30 行×15 枚以内

(いずれも Abstract (英文)、注、書誌を含む。)

2. 研究ノートは 10 枚以下、その他は研究論文の半分以下。

【書式】第 14 号所収の論文を参考にしてください。

詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) でご確認ください。

【採用通知】11 月頃

【刊行予定】2008 年 5 月

なお、この 7 月末に設けられた投稿申込締切への募集の有無に関わらず、9 月末の原稿締切までに投稿頂ければ、会誌への投稿は可能です。投稿をお待ちしております。

『英語コーパス研究』編集委員会

2008 年度の大会日程と開催校

第 31 回大会 4 月 26 日(土)摂南大学

第 32 回大会 10 月 4 日(土)東京外国語大学

学会賞について

上記、大会報告でも簡単に触れましたが、3月31日に締め切った今年度の学会賞には他薦、自薦とも応募がありませんでした。本学会の学会賞は、コーパスを利用した英語研究に貢献した書籍、論文等のほか、ソフトウェア開発等も対象にしています。若手研究者への動機づけにもなるよう奨励賞も設けております。今後

も引き続き、募集を行いますので、会員諸氏からの推薦、応募をお待ちしております。

りください。詳細は 8 月 10 日前後に、JAECS の ML でご連絡いたします。

新井 洋一(中央大学)  
東支部支部長

### 第 30 回大会の日程と研究発表募集

2007 年度の秋期大会(第 30 回大会)は 10 月 6 日(土)に立教大学(JR 池袋駅から徒歩 10 分)で開催される運びとなっております。学会創立 15 周年を記念する大会ですので、是非、ふるってご参加ください。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

ML でもご連絡いたしましたが、大会での研究発表を次の要領で募集いたしております。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること。

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【応募方法】冒頭に題名を記し、800 字～1200 字(参考文献表は枚数に含めない)にまとめ、事務局まで添付ファイルで送付のこと。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールアドレスを明記すること。

【応募締切】2007 年 7 月 2 日(月)必着

【採否決定】2007 年 7 月末日(予定)

【発表時間】発表 20 分 + 質疑応答 10 分

### 新入会員紹介(5 月 20 日現在、S は学生)

石田 知美	名古屋大学 S
伊藤 紀子	同志社大学文化情報学部
今林 修	広島大学大学院文学研究科
衛藤 圭一	京都外国語大学大学院 S
大塚 有紗	明海大学大学院 S
大塚 巖	立正大学
大庭 沙蘭	関西大学大学院 S
川島 捷宏	東京工科大学
近藤 雪絵	立命館大学大学院 S
杉浦 昇	一橋大学大学院言語社会研究科 修士課程 S
長久保 礼一	名古屋大学大学院国際開発研究科 国際コミュニケーション専攻 S
難波 香	昭和女子大学総合教育センター
野村 真理子	新居浜工業高等専門学校
長谷部 陽一郎	同志社大学言語文化教育研究 センター
堀田 秀吾	立命館大学法学部・大学院言語 教育情報研究科
森脇 可奈子	立命館大学言語教育情報研究科 S
安波 誠祐	熊本大学
渡部 拓人	大阪外国語大学大学院 S

### 事務局から

#### 会費納入のお願い

2007 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、同封の払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

### 東支部活動報告

#### JAECS 東支部 9 月研究談話会発表者募集

英語コーパス学会東支部では、9 月の中旬(2007 年 9 月 15 日(土)・16 日(日)のどちらかを予定)、例年通り研究談話会を都内の大学で予定しています。研究発表をご希望の方は、発表者名、所属、発表タイトル(仮題可)、連絡先電話番号をお書きの上、2007 年 7 月末日までに、電子メールでお申込みください。必ず、件名(タイトル)に「研究談話会発表申込み」と記入し、araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp 宛にお送

過年度会費未納の方は、2007 年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第 14 号は 2006 年度の会費を納入していた方にのみ送付いたしております。また、2 年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

## FORUM

### John Sinclair 先生を偲んで

中村 純作(立命館大学)  
jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

3 月中旬、正確には 13 日に、Birmingham 大学名誉教授、Cobuild の Permanent Editor-in-Chief で、TWC (Tuscan Word Centre) を主宰する John Sinclair 先生が、突然、Florence のご自宅でお亡くなりになりました。インターネットの世界ですので、彼の他界のニュースはその日のうちに世界中を駆け巡り、驚きの声と偉大なコーパス言語学者の早すぎる逝去を惜しむ声が世界中で挙がりました。このことは JAECs の ML でも皆さん方にお知らせするとともに、学会を代表して奥さんの Prof. Elena Tognini-Bonelli (University of Siena) にお悔やみの手紙を、ICAME の CorporaList にも同様の趣旨のメッセージを送らせていただきました。(http://listserv.linguistlist.org/cgi-bin/wa?A2=ind0703&L=corpora&D=1&F=&5=&P=13658 をご覧ください)。

Sinclair 先生は昨年 8 月、Thomson ELT の招きで AsiaTEFL の福岡大会に来日され、JAECs でも京都と東京で 2 度にわたる講演会を開いていただき、会員諸氏にも多数ご参加いただきました。名誉会員にもなっていた矢先でした

ので突然の訃報に驚くとともに、今後ますます活躍が期待されていた偉大なコーパス言語学者がいなくなったことに加えて、個人的には親しい友人を亡くしたことで、ことのほかさびしく思っております。小生がコーパスを使った研究を続けるきっかけになったのは、今から 20 年以上も前のことになりますが、前任地徳島での Sinclair 先生との出会いでした。1980 年代初頭のことで、まだ「コーパス言語学」という言葉も無い時代に、大規模コーパス構築を謳い、今日の学問的隆盛を導いた先覚者で、年老いても常に新しい知見を見出す洞察力に刺激されつつ、その後もずっと交流を続けておりました。

現在、たまたま、Sinclair 先生の古巣、私にとっても彼との思い出の地、Birmingham 大学に学外研究員として 6 か月の予定で滞在していますが、この偉大な先覚者を偲ぶ行事が次々と行われています。去る 5 月 3 日には、Sinclair 先生の弟子でもあり、かつての同僚で、小生にとっても 15 年前の同僚である Prof. Mona Baker (University of Manchester) を招いての講演会 Sinclair Open Lecture が文学部で、翌 4 日には同じ Birmingham にある Aston 大学で、これもかつての同僚、Prof. Malcolm Coulthard (Aston University) を中心に、本来なら彼も参加したはずのシンポジウムが開かれました。JAECs29 回大会に出席のため一時帰国していた小生はこの 2 つの行事には出席できませんでしたが、5 月 23 日から 27 日にかけて Stratford-upon-Avon で開催された今年度の ICAME の大会、ICAME28 には日本から JAECs のメンバー 2 名、家入葉子先生(京都大学)と事務局長の山崎俊次先生(大東文化大学)とともに小生も参加し、研究発表を行いました。Cobuild の初期の時代の同僚 Prof. Antoinette Renouf (University of Central England) を中心に準備されたこの大会もやはり Sinclair 先生を偲んでの大会となりました。さらに 6 月 14 日には、Birmingham 大学文学部の中庭で彼の名前を刻んだベンチの献呈の式と偲ぶ会が開かれます。

Sinclair 先生が亡くなられたことは、コーパスを利用した英語研究の第 1 世代が終わりを迎

え、次の世代への交代の時期になりつつあることの象徴的な出来事だと初代会長の齊藤俊雄先生も仰っていますが、ここまで、築きあげられてきたコーパスを利用した研究の成果と伝統を受け継ぎ、発展させるのはまさに我々残された者を除いていないことを改めて実感しています。機会があれば繰り返し言っておりますように、会員の皆さん、特に若い会員の皆さんには、Sinclair 先生なき今、第 2 世代の牽引力として今後ともますます研鑽をつみ、努力されることを、ここでも再びお願いいたします。

## ICAME 28 に参加して

家入 葉子(京都大学)  
yiyeiri@bun.kyoto-u.ac.jp

先日の 5 月 23 日から 27 日にかけて、英国 Stratford-upon-Avon で開催された ICAME 28(第 28 回大会)に参加しました。世界各国から 150 名ほどの研究者が、William Shakespeare 生誕の地である、小さな美しい町に集いました。英語コーパス学会から 5 日間を通して参加したのは、中村純作先生(立命館大学)、山崎俊次先生(大東文化大学)と私、家入の 3 名です。中村先生は、在外研究中のバーミンガムからの参加です。私自身、ICAME への参加は初めてでしたので、過去の大会との比較はできませんが、ドイツなどを中心に若手研究者の参加がずいぶん増えてきているという印象をもたれた方が多かったようです。

Plenary では、Stanley Wells, Geoffrey Leech, Joan Beal, Harald Baayen, Christian Mair, Bas Aarts の 6 名が報告を行ない、その他に full papers が 60 本あまり、work-in-progress reports が 20 本あまり、さらにソフトウェアの紹介やポスターなど、充実したプログラムが用意されていました。日本人研究者の発表タイトルを紹介すると、“What’s good and what’s bad in the BNC World Edition? Cross examination of multivariate analyses revisited” (Junsaku Nakamura & Michiyo Kasahara), “Comparative analysis of comparison of

adjectives in Modern English” (Shunji Yamazaki), “Turn-initial words in the Corpus of Spoken Professional American English” (Yoko Iyeiri, Michiko Yaguchi & Yasumasa Baba) となっています。

全体としては、歴史言語学、現代英文法・語法、ディスコース研究、方言研究、社会言語学、ソフトウェア開発、統計学など、異なる分野の研究者が集まるバランスのよい学会であるという印象をもちました。具体的には、歴史言語学部門で異綴りの問題が話題になると、やはり同様の問題を抱える現代英語の方言研究者が議論に参加するなど、興味深いやり取りが見られました。また、大会 4 日目の午後に組まれたパネル・ディスカッションでは、“Global English—global corpora” をテーマに、Anna Mauranen, Joybrato Mukherjee, Pam Peters が簡単な意見を述べたあと、Marianne Hundt の司会で、参加者全員で討論を行いました。議論が政治的な方向に流れすぎたという意見もありましたが、タイムリーな話題を扱った興味深い企画であったと思います。

大会の詳細は、<<http://rdues.uce.ac.uk/icame/>>でも見ることができます。プログラムと共に、大会の雰囲気を示す写真が多数掲載されています。また、最後になりましたが、今回の ICAME は、先日急逝された John Sinclair 教授に捧げる大会でもありました。